令和３年度押原中学校第３学年通信　ＮＯ，１７

Creative Blue

修学旅行
②号

３学年主任　　芦澤　良美

京都に学ぶ　～修学旅行事後レポートより～

修学旅行を通して、様々なことを学び、また一つ成長した青学年の生徒たち。事後レポートには、実際に京都にいったからこそ、考えたり、感じたりすることができた内容が描かれています。その事後レポートの一部を紹介します。

清水寺

☆下から清水の舞台を眺めると、写真で見るよりも迫力があった。くぎを一本も使わない「懸造り」で建てられた本堂。この建築方法を考える発想力が、実際に見て、よりすごいと感じた。崖に造ろうとしたことがおもしろい。自然がつくった大地に感動して、建てたのかなとも思った。

☆古くから庶民に親しまれている清水寺。どこのお寺よりも混んでいて、昔も現代も一緒だなと思いました。このように親しまれているのは大きな慈悲を象徴する観音様の霊場だったからかなと考えました。再建された部分が多い清水寺ですが、本来の姿を残そうとする努力が感じられてすごいなと思いました。

☆清水の舞台は、もともと十一面観音像に雅楽や能などの芸能を奉納するために造られたのだということがわかりました。舞台からの景色はすごくきれいでした。友達と話しながら歩くだけでも楽しいのですが、さらに舞台からの眺めで、楽しさは倍増しました。

伏見稲荷大社

☆伏見稲荷大社の入り口のキツネがくわえているものは、「鍵」「玉」「巻物」「稲荷」だと知りました。農耕の神様としてまつられていましたが、中世から近世にかけて、「商売繁盛・家内安全」の神様として広く信仰されるようになったそうです。見どころの「千本鳥居」はとてもきれいで、朱色の鳥居は、幻想的で私たちの住んでいる日本にこんな場所があるのだと思いました。

☆伏見稲荷大社の鳥居の朱色は、外国ではあまり見ない色だということをタクシーの運転手さんに教えてもらいました。だから、伏見稲荷大社は外国の人に人気なのだと思いました。鳥居の裏には、一つ一つ奉納した人の名前が書いてあります。長い間、多くの人々に信仰されてきたことを感じました。

三十三間堂

☆千手観音は調べたとおり口や目などが微妙に違っていて、自分や友達に似ている像を探すのがおもしろかった。一体一体の顔以外はつくりが同じで、職人の腕の高さに驚いた。風神雷神は写真で見るよりも大迫力で、水晶を入れた目が反射で光ることによって本当に鋭い眼光でにらまれているように感じた。血管一本一本まで細かく刻まれていた。

龍安寺

☆事前に石庭を上からみた模型をみた。石は１５個あるが、実際にみると、１３か１４個しか見えない。１５は仏教では「完成」を表しており、どこから数えても足りないのは、まだ完成していないから修業を続けよ」というメッセージが込められているとも言われる。「いつまでも絶えず努力を続けていくべきだ。」という教えは見習いたいと思った。

金閣寺

☆写真で見てきたものとは違う美しさを感じました。屋根の上の鳳凰は、蛇、鳥、トカゲ、龍などが組み合わされて作られた伝説の鳥です。この鳳凰は義満を表しているという説もあると聞きました。池の色は、金閣寺を美しくみせるために工夫されていました。義満がお茶の水をくむために使った泉など、歴史を肌で感じることができてとてもよかったです。

全体を通して

☆古くからある神社に、今を生きる現代アートが融合することで、日本の「美」が進化している。日本の神社が進化することで、まわりの景色や趣が変化するところがおもしろい。四季によってみられる景色も変わるので、いろいろな時期に行けば、さらに京都を楽しむことができる。また、機会があったら行きたいと思う。

☆実際に建物や仏像を見ると、写真では味わうことのできない迫力を感じることができた。今回の旅行で感じた匂いや音は強く印象に残っている。建物が現在まで形を維持しているのは何回も修復や点検が繰り返されているからだ。どのようにして修復しているのか、興味がわいた。昔の建築技術や物語が受け継がれてきたように、私も祖父母や両親から学んだことを次の世代に伝えていきたい。今回の旅行で学んだことを、勉強に関連づけて、楽しみながら学んでいきたい。

☆日本人の観光客だけではなく、外国の観光客もいたので、日本の建物のなかには、国を越えて感じることのできる魅力があるのだと思った。今回は、建築の特徴を知るという目的だったが、目的を持ちながら、何かをすることで、より充実するものだと思った。今回見ることのできなかった建築をまた見て、その魅力について知りたいと思った。